

令和7年度 奈良市立富雄南こども園 研究実践概要

園長名 和田 江利子
全園児数 85名

1. 研究主題 「自ら遊びを創り出す子どもの育成」～遊びは学び～
2. 研究年度 二年度
3. 研究主題設定理由

研究初年度は、子どもの主体的な遊びを支える環境構成の工夫に着目し、身近な「もの・ひと・こと」と関わる中で、子どもが心を動かし、自ら遊びを創り出す姿に迫った。その結果、子どもが能動的に身近な環境と関わる体験を積み重ね、それまでの経験を活かし、さらに新たな気付きや発見を得て、遊びを創り出していく姿や過程があることが明らかになった。そこで本研究では、遊びの発達過程において、子どもがどのような経験を積み重ねながら三つの資質・能力を身に付けていくのかについて分析する。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

身近な環境に主体的に関わる中で、子どもが自ら判断して行動し、心を動かして遊びを創り出す過程を大切にしながら、三つの資質・能力を育む。

②研究の重点

- ・遊びを通して、「**知**知識や技能の基礎」「**思**思考力・判断力・表現力等」「**学**学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力がどのように育まれていくのかを探る。
- ・経験の積み重ねが次の遊びの創出へとつながる過程を可視化し、「遊びは学び」であることを実証的に示す。

③活動の方法

- ・三つの資質・能力の視点で実践事例を分析し、相互に関連しながら育つ過程を捉える。
- ・「思考力・判断力・表現力等」に着目し、遊びの姿を通して子どもの内面理解を深める。
- ・実践事例をもとに、各年齢の発達の姿や遊びを創り出す姿を可視化する。

— **知** — **思** — **学** 三つの資質・能力、 ___ 援助、 _____ 環境構成、 [] … **思** の読み取り

《事例1》 3歳児「見て！お花みたい！」7月

A児はタライにはった水を運んだり、移し替えたりして遊んでいたの
で、様々な形や大きさの違う容器を用意しておいた。その中で、A児は
半分に切ったペットボトルに興味をもち、①口を逆さにして別の容器を使
って何度も水を入れようとするが、置いても持っても安定しない様子が見
られたので、翌日の遊びの姿を予測してキャップの蓋を締めたペットボ
トルを逆さに吊して環境を再構成しておいた。すると、早速A児が見つけ
て遊び出す。両手が自由に使えるようになったことで、②両手で水を汲ん
では入れて水を溜める。しばらくすると、今度はスポンジに水を含ませて
両手で絞って入れ始めた。③「いっぱいになってきたね。」と言いながら
保育者と一緒に遊ぶ。④水がいっぱいになり溢れてくると、ペットボトルを
じいっと見て、A児「これ(キャップを)外したい」と保育者に伝える。蓋の
外し方を伝えながら一緒に外すと、勢いよく水が流れ出した。A児「うわ
ー！すごい！」と飛び跳ねて驚きながら保育者と顔を見合わせて笑い合
う。今度は自分でキャップを外して地面に穴が空く程の勢いで流れる水
の様子に、A児④「もう一回しよう！」と何度も繰り返す。

①②興味をもったことを行動に移し、何度もやってみる

③いっぱいになって溢れた水を見つめて、ペットボトルのキャップを外すことを思い付く

④地面に穴が空く程の勢いで水が流れる様子に心を動かし、「もっとやってみよう」という思いを言葉にする



またしばらくすると、今度は^⑤砂場用具の方へ向かい、お椀等の容器を持って来て、ペットボトルの下に置いて水を入れ始める。キャップを外すと、水が容器に入るといより、飛び跳ねる勢いで溢れ出た。A児「わー！！」と驚く。保育者も驚きに共感し、何度も繰り返す姿を見守る。A児^⑥「見て！お花みたい」「ニューフォーみたい！」と、飛び跳ねる水の様子を嬉しそうに伝える。①「本当だね。いろいろな形に見えるね」と思いに共感すると、A児「違うのしてみる！」「これは？！」と、^⑦下に置くものを替えて水の動きを楽しむ姿が見られた。



⑤流れ出た水を下の容器で受けようと考え、使ってみようとする用具を選んで持ってくる

⑥飛び跳ねる様子の違いを自分なりに知っている言葉で例えて伝える

⑥⑦様々な用具を使って、跳ねる水の動きの違いを確認する

＜考察＞

- 水の移し替えから、半分のペットボトル容器に興味をもったことをきっかけに、水が勢いよく飛び跳ねる現象と出会い、心を動かして何度も繰り返すようになる。繰り返しの中で、ペットボトルの下に置く対象物を替えることを思い付き、水の動きの違いに気付いた。
- これまでの経験から得た「知」を活かして次に自分なりに考えた方法で行動に移す行為を「思」と捉え、自身が得た驚きや気付きにより「学」の育ちにつながっていく姿を捉えた。②の姿には、両手で水を汲む、スポンジに水を含ませて両手で絞るといった「知」の姿もあり、⑥では水の形の面白さに好奇心を高める「学」の姿も同時に捉えることができた。

《事例2》 4歳児「色が出てきた、見てみて！」6月

すり鉢やすりこ木を使って花や草から色が出ることを面白がりながら色水づくりを楽しんでいる。繰り返し遊ぶ中で、それ以外にも様々な方法で色が出せることを知ったり、自分なりに考えたり試したりしてほしいと考え、ビニール袋や泡立てネット、ペットボトル等、使い慣れた身近な素材だけでなく、タワシ等の新たな用具も用意した。^⑧B児「袋でやってみる！」とビニール袋に花を入れ、指先で揉んで「色いっぱい出ないなあ」とビニール袋をじっと見つめる。^⑨「今度は水を入れてみよう」と、袋の上から指でこすり合わせ、B児「色が出てきた！見てみて！」と、同じ場で色水遊びを楽しむ友達や保育者に気付きを伝える。^⑩「とっても濃い色が出たね！」と共感すると満足そうに笑い、再び花を選びに行く。^⑪C児は「これはどうかな？」と、持ち手付きタワシとすり鉢を選んで、アジサイの葉を使う。それを見て^⑫D児が「それ、靴を洗う時に使うタワシやん」B児「うんそう。ゴシゴシ洗うみたいにやってみる！」とイメージしながらこすり始めた。^⑬B児「見てみて！こんなに色出たよ！」C児「タワシってめっちゃ色出る！」と発見したことを共有する。^⑭「タワシで色が出るんだね、大発見！」と認めることで、嬉しそうに満足感を味わっていた。^⑮発見を遊びの後の振り返りでB児らが友達に伝えると、「ええ！タワシでも出るん？！」と他児も驚く。

翌日、^⑯話し合いに興味をもったE児はタワシとすり鉢を使って遊び出す。E児「Cちゃんみたいにこんなに色出た！」と嬉しそうに見せ、「ゴシゴシって力入れたら結構出た」と、自身が見つけた発見を伝える姿に保育者も共感する。さらにE児は「これも使えそう！」と、^⑰スプーンの持ち手でこすってみたり、袋の上からすりこ木でトントン叩いてみたりして、様々な方法で試し、用具の組み合わせや使い方を考えて遊ぶ姿が見られた。

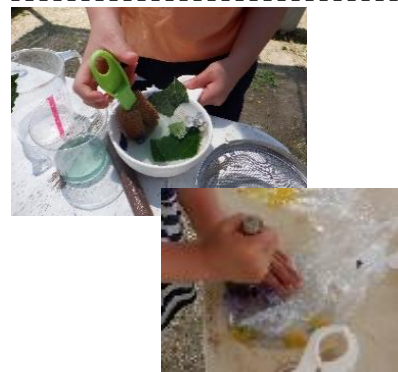
⑧⑨3歳の頃の経験から予想してビニール袋を選び、じっと見つめて確かめたり、伝えたりする

⑩自分なりに自分なりに別の方法を考えてもっと色を出そうとタワシを選んで試す

⑪⑫⑬互いに気付いたことを伝え合い、新たな発見を共有する

⑭得た知識を使って見出した発見を他者に伝える

⑰用具の組み合わせや使い方を考えて様々な方法で試す



＜考察＞

- たくさん色を出したいという目的をもって様々な方法で試す姿の中で、始めは知っている用具を使って試してみるが、新たな用具や方法を用いて、色の濃さ、用具の効果、使い方の工夫等の気付きや発見を、友達との関わりの中で見出していき姿を捉えた。そこには、子どもの実態から予測して意図的に環境の工夫を行ったり、友達との関係をつないだりする保育者の役割も大きく影響している事が分かる。
- 自分の気付きや発見を保育者や友達が受け止めたり、共感したりしたことで、達成感や満足感を味わい、さらに別の方法でも試したり、確かめたりしようとする意欲につながった。

○「もっとこうしてみよう」とする好奇心や探究心の高まりを「学」と捉え、目的を達成するために工夫したり試したりする姿が「思」と考える。また、さらに新たな発見を得ようと「知」を活かして別の用具を取り入れたり、新たな方法を考えたりして試す「思」の姿から、経験の積み重ねにより三つの資質・能力が相互に関連しながら育まれていく発達過程を捉えた。

《事例3-1》 5歳児「乾燥から見つけた発見」 7月

前日に色水遊びで使った紫蘇が、ザルに残っていたのを見つけたF児。「パリパリになってる」と触ると、葉が崩れて粉々になった。^⑯それを見たG児が「フリカケみたいになったなあ」と言うと、F児も「ほんとや、フリカケにしか」と、今度は両手をこすり合わせて葉を細かな粉状にした。^⑰「このフリカケおいしそう。何にかけるの？」G児「シソジュースにかけるよ」と、^⑱F児はそのやり取りを聞きながら粉状の紫蘇を見つめて考える。そしてF児「これに水入れたらどうなるんやろ？」と呟き、水を注いでみる。スプーンで混ぜながらF児「すぐ色がついた気がする?!」とG児に知らせる。G児「え?こっちはずっと水に入れたのに何でやろ?」と、不思議そうに一緒に見つめる。^⑲「何でだろうね?」と不思議さに共感し、一緒に考えながら様子を見守る。すると、^⑳F児が「もう一回つくってみるわ」と試し始めた。F児「やっぱり普通の葉っぱよりすぐ色出てくる!」と、気が付きが確信に変わり、嬉しそうにG児や保育者に伝える。F児の発見に、G児「それめっちゃすごいやん!早くシソジュースつくれるな!」と興奮する。保育者も「大発見だね」と一緒に興奮しながら思いに共感する。その後、^㉑さらに2つの色水を比較し、色が出る早さだけでなく、生の葉の方が匂いが強い事を発見し、友達と共有する姿が見られた。

⑯ 気が付きを知っているものに例えてその状態を伝える

⑰ 友達と考えを伝え合って新たな考えや方法を見出そうとする

⑱ 曖昧な気付きをもう一度確かめて、発見を確かなものにする

⑲ 2つの色水を比較して、違いや発見を共有する



⑳ イメージしたものを工夫してつくる

《事例3-2》 「ネイルチップみたい!」 9月

カップに残ったボンドが乾いて取り出せた発見から、^㉒細かく切ったスズランテープとボンドを混ぜてマドラーを入れて乾かし、容器から取り出して飴づくりを楽しむようになる。別の日、H児が切り落とされたボンドの固まりを拾い、「これ何かに使えそう、きれいだし。」と眺め、ハサミで小さく切って爪に乗せると、爪に引っつく。H児「ネイルチップみたいになった!」と、嬉しそうに声をあげた。^㉓その声を聞いてI児「え!めっちゃかわいい!」J児「飴とネイルチップ両方つくれていいやん!」とH児のアイデアを活かし、乾いたボンドに色を付けたり、つくりたい形に切ったりして、ネイルアート屋遊びに発展した。

㉒ 発見を活かして工夫してつくる



《事例3-3》 「泡の固まりをよく見みると」 12月

玄関昇降口の書画カメラや大型テレビ、パソコンを設置した“見てみよう調べてみようコーナー”で、K児がクリスマスツリーの飾りの綿を、書画カメラを通してテレビに映す。^㉔L児が拡大した綿に驚くと、M児「これ、あれに似ている?」と、保育室から石鹸を泡立ててシリコンカップ等に入れて乾燥させた泡の固まり(ケーキ)をもって来て、再び画面に映してみせる。M児「ボコボコしている」と^㉕表面の凹凸に気が付き、手で泡の固まりの感触を確かめながら角度を変えて映してみる。別の固まりを映すK児「こっちはいっぱい穴が空いている?!」と、^㉖穴の量に気が付きて綿と交互に映し、比べて似ていることを発見する。そのやり取りを見てM児「やっぱり似てた!」と発見を喜ぶ。今度はN児が「これはどう?」と、ドーナツ型の泡の固まりを映す。N児「ここはさっきみたいに穴がいっぱいあるのに、こっちは全然穴が空いていない?」と、気泡がある所とない所の違いに気が付き、^㉗K児「こっちはフワフワの泡でできていて、そっちはトロトロの泡だったのかな?」等と、泡の違いと見え方の違いの関係について考えを出し合う。この発見を写真に撮り、振り返り際に保育室のテレビ画面に映して、クラスで発見を共有した。

㉒ 生活経験から似たものを思い付き、映して比較してみる

㉓ 目で見て気付いた凹凸を、感触と映像の両方で確かめたり、他の部分も調べたりする

㉔ 穴(気泡)の量にも気が付き、綿と泡の固まりを比較して類似点を発見する

㉕ 穴(気泡)の有無と、泡の質の違いの関係生について話し合う



〈考察〉

- これまでは使えなくなったものと認識していた乾燥した紫蘇が、粉々に崩れた現象を見て、G児が「フリカケみたい」と例えたことから興味をもち、「乾燥させて使う」という視点を取り入れて遊ぶようになった。紫蘇は、乾燥したものと生のものを比較して、水に入れた時の色の出具合や匂いの違いを発見した。ボンドは、カップ等に入れて乾燥させて取り出すと、爪に引っ付くという発見からネイルアート屋遊びに発展した。泡は、書画カメラを使って大型テレビに映した綿の映像から、泡を固めた固まり（ケーキ）と似ていると感じたことを、実際に比較した拡大映像から共通または類似していることを確かめる姿につながった。さらには、穴の有無や量にも着目し、泡の質の違いとの関連性についても考えるようになった。このように、「乾燥」という一つの現象から、新たな見方や側面を発見して遊びを創り出す姿を捉えた。
- 身近な環境の一つとして、日頃から目にする場所に見たり調べたりできるコーナーがあることで、興味をもったことや疑問に感じたことをすぐに確かめることができ、新たな気付きや発見につながった。

また、気付いたことを共有し合う友達との関わりから、互いの考えを受け入れ合う中で、さらにひらめきを生み、新たな発見につながる姿が見えてきた。
- 子どもの遊びの姿を長期的スパンで読み取ることで、経験したことを活かしたり、多角的に捉えたりして新たな「知」を得ていく過程が見えてきた。その中で、疑問に感じたことを試したり確かめたりする「思」の過程で、さらに疑問が湧き、「もっと知りたい」と探究する「学」の姿や、「やっぱり綿と泡の固まりは似てた」等と、新たな発見による「知」を得ていく姿を同時に捉えた。このことから、相互に関連しながら三つの資質・能力が育まれていくことが分かった。

5. 研究の成果

実践事例を基に、遊びの中で感じたり、考えたりしながら、実体験を通して自分なりに理解していく過程が見えてきた。学びは、この理解につなげるための分かろうとする、できるようになる過程であり、面白さや不思議さ等の好奇心や探究心から、主体的に「もっとやってみたい」という意欲が高まる内発的動機によって育まれていく過程を捉えた。また、保育者や友達など、人との関わりによって変容していく成長の姿も見られた。

各年齢において、子ども自身が考えたり、試したりしながら、経験を積み重ねて新たな気付きや発見を得る発達の姿が見られたことから、遊びは学びが生まれる営みであり、遊びそのものが「学び」であると言える。このことから、自ら環境に働きかけ、試したり、工夫したりして、保育者や友達と関わりながら遊びを展開していく姿を大切に見取っていくが必要であることが分かった。

そして、三つの資質・能力の視点で事例を分析することにより、相互に関連しながら育つ過程を可視化した。その中で、「知識や技能の基礎」では、子どもが自ら遊びを創り出すために、様々な用具や素材等の身近な環境を取り入れ、新たな価値を見出したり、必要感をもって使ったりすることで、確かなものになっていく視点が重要となった。「思考力・判断力・表現力等」では、遊びを創り出す過程で、考えたり、試したり、表現したりする思考の連続によって見出される発達過程が重要となった。「学びに向かう力、人間性等」では、自ら遊びを創り出すための主体性が重要であり、自発的に環境と関わり、夢中になったり、粘り強く事柄と向き合ったり、協同的に進めたりしていく発達過程を保障していく視点が重要となった。

これらのことから、保育者は、遊びの形を追うのではなく、遊びを創り出している過程に着目し、環境構成や援助の在り方を見直し、工夫していく必要があるということ学んだ。

6. 今後の課題

保育者が遊びの様子を見取る際に、子どもの発達の姿や内面理解につなげられるよう振り返りを継続的に行い、心を動かして遊びを創り出す過程を大切に、三つの資質・能力を育むために「環境を通して行う教育」の必要性について今後も検証していきたい。